

私たちが、長野県知的障がい福祉協会主催の「自閉症支援セミナー」や「精神科領域支援セミナー」の数々の事例を通して学んできたことは、今まで適切な支援を提供されることがなかったその人に（その人が何者であってもそれは変わらない）、出会ったその後から、いったいどんな支援を、どんな順序で提供していったらいいのか、ということについての一定の方向性です。それは、嵐の海に船を出そうとするときの羅針盤と海図に似ています。両支援セミナーを通過した事例は、この間の実践で300事例近くになり、その事例の行動変容を概観することで、およその支援の方向性を見いだせるということになります。

出会ったその日に始めるべき支援は、前回＜連載35＞において述べたとおり、「今日からは叱られないよ」という傾聴と相談のスタンスです。そして、その次に来る支援が、自己選択、自己決定場面を含んだスケジュールの作成なのですが、この自己決定、自己選択を支えるのが、＜叱る－叱られない関係＞ですので、決してこの順番を変えることができないのは、お分かり頂けると思います。

＜叱られてばかり＞で生きて来た人は、まずは、自分の言い分を聞いてもらった経験が非常に乏しい人です。何を言っても（思っても）、否定されたり、無視されたり、気がつかれなかったりすれば、どんな人でも（障がいがあってもなくても）、自己主張をすることを諦めていきます。主体性が後退していくのです。発信力が弱くなり、時には無くなって、皆と同じことを従順にすることで適応をしていくことさえあります。また、それとは正反対に、我慢と爆発を繰り返し、自分の気持ちの在りどころさえも分からずに、ただただ嫌われ者になっていく人生を歩む方もいます。

そんな方々を前にして、私たちは最適な自己選択、自己決定場面を用意するために、＜叱る－叱られない関係＞を作りながら、その人の好きなもの、好きな活動を探していきます。

例えば、Aさんが、自転車乗りと電車のDVDを見るのが好きだと分かった時、日課の中に自由時間や休憩時間を設定し、その時間に、自転車乗りをするのか、電車のDVDを見るのかの選択場面を設定するのです。最初の自己決定場面の設定は、好きなもの、好きな活動場面を選ぶことで、少ない心的エネルギーで選択ができ、選択できた時の喜びが多いがゆえに、次の選択の挑戦への心的エネルギーを蓄積することにもつながります。Bさんが、シュークリームとアイスクリームが好きだと分かれば、おやつ時間に選択場面を設けるのです。

二次障がい、三次障がいに陥っている方々の多く暮らしは、残念ながら一日の活動の中に、本当に心からワクワクするようなことがないのが圧倒的標準です。一日のスケジュールを作成していくとき、その中に一か所でもワクワクするような自己選択、自己決定場面ができることで、その選択場面カードは、無味乾燥な一日の中で、圧倒的な輝きをもって、彼らに迎え入れられることでしょう。

何を聞いても、「ウン」と頷いてしまうCさん、どんなカードを見せても右側ばかりを選んでしまうDさん、選択を相談する職員が変わるたびに答えが変わってしまうEさん、表情カードで何を聞いても「満足だ」しか選ばないFさん…、幼少期ならともかく、青年期、成人期におけるこのような行動は、認知上の課題ではなく、主体性の後退という関係上の課題として取り組む必要があるのです。

＜たった一つの自己選択がその人の人生を変えていく＞、それは、自分の自己選択が周りの人間関係を動かしていく、その経験が、その人の自信につながっていくからなのです。

ただし、上記の自転車乗りも電車DVDも、シュークリームやアイスクリームの場面も、支援者や家族の方と＜一緒に楽しむ＞が必須条件です。一人ぼっちでやってみても、決して主体性の回復にはつながりません。手を抜かない実践が求められます。